〔研究ノート〕

『オーウェル著作集』全四巻（平凡社）翻訳点検

―― その1 ――

西村　徹

外国語の翻訳をするとき，誤訳をしたり，幾何の問題を解くときに愚かな間違いをしたり，フランス語の作文をするとき，変な文体になったり，思想の脈絡が首尾一貫しないものになったりするのは，みな，思考があまりにも性急に対象にとびかかり，そのために，あまりにも早く成熟しすぎて，真理を待望する姿勢を失ってしまうことから起こる。

シモーヌ・ヴェイユ

（田辺　保訳）

翻訳というのは割に合わぬ仕事である。論文ならば理解の届きかねる部分には手を出さずに避けて通ることもできる。ところが翻訳はテキストという相手のある仕事だから，逃げも隠れもしようがない。分からないところに打突かって身動きが取れなくなって，四苦八苦して切抜けても，うまくゆけば元々で，もしそれがうまくゆかなければさんざんということになる。

というようなわけで，翻訳をあげつらうのは気の重いことである。しかし翻訳は，訳者がともかくも70点なら70点の仕事を成し遂げたという側面の評価だけですむものではない。多くの人が原典を通さず翻訳によって原典理解を得ようとするものだから，翻訳はその社会的責任からも逃げられぬ。論文

にしても，ずいぶん人を誤たせることもありはするが，その程度は翻訳の比ではなかろう。だから翻訳の方が，よほど他人の眼も加わって，批判というより協力する必要があると私は考える。まずいと分かれば改訂版を出すというのが，いちばんよいが，そうもゆきかねるからといって批判は御法度というのでは困ると思う。なにしろ文献理解の基本にかかわることなので，野暮は承知，鼻つまみも覚悟の上で，よせばよいのにという声も聞こえるけれども，やってみようと思う。

とりあげるのは『オーウェル著作集』全四巻（平凡社1970年刊）。まるまる全部であるはずもないが，かなり問題のあるものも少なくない。今どの程度に読まれているのかは知る由もないが，少なくとも図書館には備えているところが多い。私自身この著作集には相当にお世話になった。御恩返しになるかどうかは分からぬが，私としてはそのつもりでいる。テキストと照らし合わせて，あれこれと，なかなか楽しませてもらったからである。

さて，配列の順を追うのが，いちばんめんどうがないけれども，ちょっとそれでは締まらないので，やはり初めに，誰が見てもなるほどこれはと納得のゆくものを掲げ，しだいに付録めいたものに進む。龍頭蛇尾ということにもなろうが，「楽しませてもらった」というほどには，趣味のちがいと言われそうな水準の事柄にも言い及ぶことになろう。

原文掲出に際しては平凡社版が底本としている The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell, 4 vols, edited by Sonia Owell and Ian Angus. Secker and Warburg, London, 1968. に拠り，該当ページを記す。ペンギン版の方が遥かに流布しているが，巻数，タイトル・ナンバーは共通なのでペンギン版ページはなくとも照合は容易である。

*　*　*

まず Vol. 2の3「走り書的ノート」(pp. 16～19) を取上げる。原文タイトルは Notes on the Way (pp. 15～18)。ひとまず第二段落をごらんい

ただきたい。

魂が切り取られるのは絶対止むを得なかった。かつてわれわれがいだいた形での宗教的信仰は，見捨てられなければならなかったのである。十九世紀頃すでに，それは本質的にひとつの虚像，富める者を富ましめ貧しい者を貧しいままにしておく，半ば意識的な仕掛けであった。貧しい者はその貧しさに満足せざるを得なかった。それはすべて彼らにとっては，通常キュー植物園（ガーデンズ）（割注略：筆者）と宝石店との中間のものとして描きだされる死後の世界において取りもどせるものだったからである。私は年収一万ポンド，諸君は週給二ポンドだが，われわれはみな神の子なのだ。そして資本主義社会のあらゆる機構を通じて，同じような虚偽が行われてきた。それは絶対に暴露すべきことであった。（p. 16）

It was absolutely necessary that the soul should be cut away. Religious belief, in the form in which we had known it, had to be abandoned. By the ninteenth century it was already in essence a lie, a semi-conscious device for keeping the rich rich and the poor poor. The poor were to be contented with their poverty, because it would all be made up to them in the world beyond the grave, usually pictured as something mid-way between Kew Gardens and a jeweller's shop. Ten thousand a year for me, two pounds a week for you, but we are all the children of God. And through the whole fabric of capitalist society there ran a similar lie, which it was absolutely necessary to rip out.

(p. 15)

両者をざっと見較べて，翻訳にさしたる落ち度は見当たらぬではないかというのが，さしずめ大方の反応であろうと思う。たしかにそうであろう。ましてや翻訳だけ見ればなおさらであろう。意味は通っている。困ることはな

にもない。さて原文を見ても，さほどに凝った文章ではなく，平明な文章だから，これほどの翻訳なら十分ではないか，というのも大方の反応かもしれなぬ。

しかし，もう一度，こんどは少し注意して見ていただきたい。冒頭の It was absolutely necessary that . . . は段落末尾に it was absolutely necessary to . . . と繰り返される。そして第二文も，第一文 It was absolutely necessary を受けて Religious belief . . . had to be abandoned. のように have to が使われている。これはこの文章のベクトルというか勢いそのものを決定する決め手になっているだろう。さりとて翻訳において，この三箇所の訳語を一つに揃えよというつもりはない。しかし，それぞれに選択する訳語はちがっても，そこに一本筋が通っている必要はあるだろう。そもそも「絶対」という強い語と「止むを得なかった」という消極表現とがなじむであろうか。敏感な人ならば訳文に接しただけでも，音程が外れているような奇妙な居心地の悪さを感じるはずである。などと言えば，それは翻訳に対する要求過大ということになるのだろうか。大筋の意味が取れればよいのであろうか。しかし，文字のみでなく，音声を介して英語を母語とする人間と接したことのある者なら ABSOLUTELY necessary と発音されるときの，その強調のほどは十分に分かっているはずである。そうでなくても，OED にあたってみるだけでも，この場合の necessary に「止むを得ない」があたらないことは分かるだろう。ここに OED の記載を逐一繰り返さないが，第一義の用例に absolutely necessary を含む Swift からの用例があり，すぐひきつづいて b. *It is necessary that* or with *inf.* の用例が掲げられている。「止むを得ない」にあたる語義は，ようやく第六，七の項にあらわれているだけ。こんな気障ったらしい，これ見よがしの見せびらかしは本意ではないが，これくらい言っておかないと，ちょっとした言葉遣いの趣味だとか，揚足とりだとか言われかねないのでくどくなった。

それにしても，いくらその翻訳が賃取りのやっつけ仕事であるにせよ，また初見のテキストであるにせよ，まさか闇雲に一語一語片付けてゆくわけで

はあるまい。少なくとも段落くらいは目を通した上で筆を下ろすだろう。そうすれば最初と最後に全く同じ文型が置かれていることに，少なくともいくらか詩を読むほどの人ならば，いやでも気づくはずであろう。それがいかにこの段落全体の調子を決定しているかに気づくはずであろう。最初も最後も「断じて必要であった」ぐらいに決めておくことが断じて必要であろう。辞書などの裏づけを待つ以前に，そのあたりに神経を届かせることが，翻訳の基本姿勢であって，そこがやわで，たるみがあると，一事が万事で度外ずれた誤訳にも陥ることになるのである。

度外ずれたと見るか見ないかは読者の勝手であるが，私には度外ずれたと思える誤訳をお目にかける。同第四段落。

あたかもこの十年の間に，われわれはいつのまにか石器時代にもどったかのようである。数百年の間消滅したものと想像されてきたいろいろなタイプの人間，躍る修道僧，盗賊の首領，大審問官たちが，突然，精神病院の患者としてではなく，世界の支配者として，ふたたび現われた。[1]機械化とか集産主義経済とかは一見しただけで十分ではない。[2]自然彼らのたどりつく先は，今われわれが耐えている悪夢 —— 不断の戦争と，戦争による不断の食料不足，有刺鉄線の背後で苦役に従う奴隷的住民，[3]一郭の，だれもが刑吏に後ろから頭を打ち抜かれるコルク張りの地下牢へ泣き叫びながら引き立てられる女たち，にほかならない。（p. 17. 下線筆者）

It is as though in the space of ten years we had slid back into the Stone Age. Human types supposedly extinct for centuries, the dancing dervish, the robber chieftain, the Grand Inquisitor, have suddenly reappeared, not as inmates of lunatic asylums, but as the masters of the world. Mechanisation and a collective economy seemingly aren't enough. By themselves they lead merely to the nightmare we are now enduring: endless war and endless underfeeding for the sake of war, slave popula-

tions toiling behind barbed wire, women dragged shrieking to the block, cork-lined cellars where the executioner blows your brains out from behind. (pp. 15～16)

ちなみにオーウェルの，この文章は『タイム・アンド・タイド』1940年4月13日の号に寄稿したもの。ここに取り上げている段落はマルカム・マガリッジ『三〇年代』というきわめて悲観主義的な書物に触れてのものである。

さて下線1はいかなる意味なのであろうか。「一見しただけで十分ではない」とは「十分でないのは一目瞭然」ということであろうか。それ以外に解釈はなさそうである。それが間違いであることは原文を「一見しただけで十分」であろう。seemingly があるのだから「どうやら十分でないらしい」つまり「機械化と集産経済とで事が収まるものではなさそうだ」ということだろう。下線2の「自然」とは原文のどの語を指すのであろうか。By themselves にそんな意味はない。「彼ら」とは誰のことであろうか。they は誰彼のことではなくて「機械化と集産経済」のことであろう。つまり「機械化と集産経済との二つだけだと」こんなことになる，ということだろう。下線3「一郭の」とはなんのことであろう。その後，読点なしのずんべらぼうだから「一郭の地下牢」ではありようもなく，「一郭の女たち」としか受けとれないが，いったいどういう「女たち」なのであろうか。「一郭」は block の訳のつもりらしいが，それにしても「一郭の」とはなりようもない。women dragged shrieking to the block，というのだから，block がなんであれ，そこへと「泣き叫びながら引き立てられる女たち」でしかなかろう。ちょっと辞書を引く労を惜しまなければ，block がこの際「断頭台」でしかないことは分かるだろう。したがって下線3は「泣き叫びながら断頭台に引き立てられる女たち，刑吏に後ろから頭を打ち抜かれるコルク張りの地下牢」ということであろう。これが度外ずれた誤訳でないものだろうか。次の次の段落，つまり第六段落はマガリッジの，全く希望のない未来予測を語って，しめくくりに「むろん私は，マガリッジ氏のこのような見通しにかなり疑問

をもつ。」と訳文ではオーウェルが述べていることになっている。,though I rather suspect Mr Muggeridge of enjoying the prospect. が原文。いったい原文の中の enjoying は訳文の中ではどこに消えたのだろうか。「もっともマガリッジ氏はこのような見通しをおもしろがっているらしいと，私は踏んでいるのだが」というところか。こうなると英語理解の基本に加えて，しゃれが分かるかどうかも関係してくるであろう。

次の第七段落はヒレア・ベロックの『奴隷国家』に触れてのもの。

> 彼には，[1]奴隷制と小所有制への復帰 —— そんなことは明らかに生じるはずがなく，また事実生じ得ないのだが —— との区別が分からなかったのである。現在，[2]集産主義社会を避けることについて問題は（ほとんど）ない。唯一の問題は，それが自発的な協力によるものか，機関銃によるものかどうかということだろう。（p. 18. 下線筆者）

> He could conceive nothing between slavery and a return to small-ownership, which is obviously not going to happen and in fact cannot happen. There is [little] question now of averting a collectivst society. The only question is whether it is to be founded on willing co-operation or on the machine-gun. (p. 16)

下線１の部分。「奴隷制と小所有制への復帰との区別がわからな」い，などということが，誰についてでも考えられることであろうか。こんなことは言語理解以前の水準のことで，奴隷制と，小所有制すなわち自由小市民主義という，およそこれほど異なるものの区別が分からないなどということがありうるかどうか，少しも思い至らなかったとは驚き入ったしだいである。ヒレア・ベロックは，おなじカトリックのG. K. チェスタトンと共に，資本主義にも集産主義にも反対した。いずれも形を変えた「奴隷制」に他ならぬとして反対した。ここに掲げた前段に「ヒレア・ベロック氏が，その『奴隷

国家』のなかで，今日生じつつある出来事を驚くほど正確に予告して以来，ほぼ三十年になるだろう。だが不幸にも，彼はどのような救済策も提示していない」と言っているのはそのことを指している。そして，この二つの奴隷制から抜け出す道として，二人は，この場合はチェスタトンの方が前面に出るのではあるが，チェスターベロックというほどに気心の合った二人は，「小所有制への復帰」を提唱した。「彼はどのような救済策も提示していない」というのは，「小所有制への復帰」など，現実性のある救済策にはならぬという，オーウェルのベロックに対する批判である。そこで下線1は「彼には，奴隷制でもなく小所有制への復帰でもないものをまったく構想することができなかったのである」と言うのが正解。そして社会主義者オーウェルは，それに続く下線2のところで「現在，集産主義社会を避けるなどということは（ほとんど）問題にならぬ」。つまり，避けることなど，まず，できない相談だ，と言っている。訳文のままだと，集産主義社会はいとも簡単に避けられるという意味になって，話はあべこべになる。

小さいことだが，次の次の第九段落（p. 18）「国家，民族，人種，階級」とあるのは，原文が nation, race, creed, class だから「民族，人種，信条，階級」とすべきことを付け加えておく。

第十段落はオールダス・ハックスリーの『すばらしい新世界』から話を起こし，この未来予測はヒトラー出現以降，諷刺としても成立たなくなったというような書き出し。

> われわれが現在歩みつつある方向は，何かスペインの異端審問より以上のもの（p. 18）

> What we are moving towards at this moment is something more like the Spanish Inquisition,（p. 17）

More like を more than とまちがえたらしいが，もちろんこれは「何か

さらにスペインの異端審問に近いもの」が正しい。

この程度のミスは誰にもあることで，さして咎めるにもあたらぬのかもしれぬが，つぎの文

もしもわれわれが，それ[1]を意義あらしめるような「来世」を必要とせず人間兄弟の信仰を回復させることができなければ，それ[2]からのがれる機会はまずほとんどないといってよかろう。（p. 19：下線筆者）

There is very little chance of escaping it unless we can reinstate the belief in human brotherhood without the need for a "next world" to give it meaning. (p. 17)

1と2と二つの「それ」のうち，2の方は「われわれが現在歩みつつある方向」すなわち「何かさらにスペインの異端審問に近いもの」を指すだろうとは推測できる。ただし1の「それ」がなければのはなし。それにしても1の「それ」がなんのことか，原文を合わせ読むのでないかぎり，読者をまごつかせることはまちがいない。訳文だけ読んで「人間兄弟の信仰」を指すものだと，直ちに了解する読者はまずあるまい。原文にしてさえ extraposition にはなっていない。代名詞の指示エネルギーが遥かに弱い日本語において，後出のものを指す「それ」の使い方はありえない。日本語では，こんなところに「それ」などと余計なことを言わない方がよほど分かりやすい。普通の日本語，つまり分かる日本語にしようならば「もしもわれわれが，意義づけのための『来世』を必要とせずに人間は皆兄弟だという信仰を復権させることができなければ．．．」になろう。字面だけ追って安易に it は「それ」でやっつけると，2の「それ」まで分かりにくくなってしまう。日本語読者に対する，この程度の配慮は，やはり最小限要求されてしかるべき翻訳者の基本姿勢であろう。

そのまま直ぐ続く文

カンタベリーの司祭長（割注略：筆者）のような無垢の[1]人々に，真のキリスト教をソヴィエト・ロシアに見いだしたと思わせたものは，まさにこのことによろう。たしかに，彼らはプロパガンダのかもに過ぎなかろう。が，そんなにあっさりだまされるのも，「天国」がいずれにせよこの地上にもたらされるに相違ない[2]，という彼らの知識[3]にもとづく。たとえ祈祷書の神がもはや存在しなくなっても，われわれは神の子であるに違いない[4]。
（p. 19：下線筆者）

It is this that leads innocent people like the Dean of Canterbury to imagine that they have discovered true Christianity in Soviet Russia. No doubt they are only the dupes of propaganda, but what makes them so willing to be deceived is their knowledge that the Kingdom of Heaven has somehow got to be brought on to the surface of the earth. We have got to be the children of God, even though the God of the Prayer Book no longer exists. (pp. 17～18)

下線1「無垢の」は無知を含んだ「無邪気な」でなければつじつまが合わぬ。訳していて文章の調子から，それが分からぬのがむしろ不思議。2，4とも，have (got) to が「相違ない」の意に用いられるのは，この時代のイギリスにはない。よほど崩れたアメリカ流の口語にはあるが，今から五十年近くも前の，しかも生粋のイートンの英語しか話せなかったオーウェルが，仮にも書いた文章の中で，そんなつもりで使うはずはない。1は「れねばならない」。4は「なければならない」であろう。したがって3は「認識」でなければならないだろう。

それに続く最終段落では，「マルクスのあの有名な『宗教は民衆の阿片である』という言葉は，常にその文脈からもぎとられて，彼がその言葉に与えた意味とは微妙にしかもはっきり違った意味を与えられている」とし，

マルクスは少なくともそこでは，宗教が[1]単に上から分かち与えられる麻薬に過ぎないとは言っていない。[2]彼の言ったのは，民衆が，彼らにとって真に必要なものと彼の認めたものを満たすために，自ら創造する何ものかなのである。（p. 19：下線筆者）

Marx did not say, at any rate in that place, that religion is merely a dope handed out from above; he said that it is something the people create for themselves to supply a need that he recognised to be a real one. (p. 19)

と続く。この訳のどこが間違っているというのではない。しかし，ここに扱われている事柄の微妙さを思うとき，それに見合って神経のゆきとどいた，緻密な訳を私は望まずにはいられぬ気がする。たしかに from above は「上から」であろうが，これだけ色濃く聖書的な表現が，この文脈の中で用いられているからには，やはり「天上から」としたいところ。また「麻薬に過ぎない」というにすぎないのだろうか。mere には「まじりけなしの」という意味が根底にある。merely は purely, exclusively に近い。文脈の上からも「天上から分かち与えられる麻薬に他ならぬ」としたいと思うが，これは私の思いこみが過ぎるにすぎないのだろうか。

下線2の訳も，木で鼻をくくったような，ぶっきらぼうに過ぎるものに思える。この部分こそ，「宗教は民衆の阿片である」という言葉だけ切り離して，もはや一丁あがりとばかりに尻馬に乗って，鬼の首を取ったようにふれまわる連中に，オーウェルが鋭い疑義を投げているところである。その重さにこの訳は見合うだろうか。このままだと，主語は「彼の言ったのは」になってしまって模糊たるものになる。余計なところでは，なくもがなの「それ」などを平気で入れながら，この場にかぎって，なぜ it が religion を指すという重要な指示を無視してしまうのだろうか。「宗教とは，マルクスも現実的欲求として認めている一つの欲求を満たそうとして，民衆が自らの手で

創造する何物かだということである」と，少々固くても緻密に訳すべきところではなかろうか。

ついでながら『ヘーゲル法哲学批判序論』の中の，この有名な文句を含む一節をここに掲出しておく。ただしドイツ語原本からでなく，1975年モスクワのプログレス出版から出た英訳版からの重訳であることをお断りしておく。いかなる文脈の中でのことかがお分かりいただけよう。

> 宗教的な苦しみはまた現実の苦しみの表現であり，現実の苦しみに対する抗議でもある。宗教は抑圧されている者のため息，無情の世の心情，まさしく霊なき状況の霊でもある。それは民衆の阿片である。

たしかに第一の文の存在することは，ほとんど知られていないようである。また，これの書かれたのが1843～4年であることを考えると，「阿片」という語の受け取られ方も，今日と同じと考えると誤るであろう。グレアム・グリーンが *Monsignor Quixote*（1982年）の中で主人公に語らせているように，当時の阿片は毒物などでなく，トランキライザーにすぎないもの，金持には手に入れることができても貧乏人には手の出ないトランキライザーであって，だから貧乏人のトランキライザーは宗教だと，マルクスの言おうとしているのはそれだけのことだと，いうような見方（ペンギン版50ページ）も踏まえておく必要はあろう。

「走り書的ノート」については，これにて終わるが，同じマガリッジの『三十年代』に触れている Vol. 1 の167「悲観主義の限界」(pp. 500～503)，原文タイトル The Limit to Pessimism（pp. 533～535）に，まったく同じ「断頭台」がらみの誤訳があるので，ついでに指摘しておく。

> 二万機の爆撃機が空を真暗にし，ヒムラー（割注略：筆者）輩下の覆面執行官が女たちの頭をニュルンベルク博物館から借りた建物に打ちつけて，幕を閉じる。（p. 502，下線筆者）

it ends up with twenty thousand bombing planes darkening the sky and Himler's masked executioner whacking women's heads off on a block borrowed from the Nuremberg museum. (p. 534)

またしても block を間違えたもので「ニユールンベルク博物館から借り出してきた断頭台の上で女たちの首を刎ねて」であろう。

*　*　*

つぎに，これはこれはというほど派手ではないが，やはり困るところのあるものとして，同じく vol. 2. 11「ファシズムの予言」(p. 30. Prophecies of Fascism, p. 30) の第三段落で，ジャック・ロンドンの『鉄足団』をH. G. ウェルズの『眠り病者の目ざめる時』と比べてみる価値があるとし，

そうすることによって，ロンドンの限界と同時に，[1]彼がウェルズのように，全き文明人に喜んでなろうとしなかった長所もまた理解できるからである。一冊の本として，[2]『鉄足団』はたいそうできの悪いものだ。それは[3]へたくそであり．．．(p. 31：下線筆者)

By doing so one can see both London's limitations and also the advantage he enjoyed in not being, like Wells, a fully civilised man. As a book, *The Iron Heel* is hugely inferior. It is clumsily written, (p. 30)

下線1は「彼がウェルズのような，全き文明人ではなかったおかげで手にし得た長所」。
下線2は「『鉄足団』はけたちがいに見劣りするものだ」。
下線3は「書き方もぎこちないもの」。
以上でなければならぬ。

第五段落（同ページ）「主として『よい時』によってものを考える支配階級」は A ruling class which thought principally in the terms of a "good time" と，わざわざ good time に引用符をつけてくれているのだから，have a good time のあれで，「よい時」ではさまになるまい。「『楽しい時』という枠組で」というぐらいのところだろうか。あるいは「『楽しい』かいなかで」の方がよかろうか。

次の第六段落では，ロンドンには自身ファシスト的性行を持っていたがゆえに，資本主義が，その危機に際してファシズムによって延命をはかることを知っていたとし，続く第七段落では

マルクス的社会主義者たちの常に及ばなかった点は，まさにここにある。彼らの歴史解釈はあまりに機械論的であり，かつてマルクスの名を耳にしたことのない民衆[1]にとって自明の危険をも，彼らは予見できなかった。彼[2]がファシズムの台頭を予言できなかったのは，時にマルクスに異を唱えたためである。彼がそれを予言したかどうか私は知らぬ —— その時，[3]ごく一般的にいってそうしかできなかったのだろう —— が，少なくとも彼は，[4]彼の信奉者たちが強制収容所の入口に連れて行かれるまでファシズムの危険に気づかなかったことは，確かである。（pp. 31～32：下線筆者）

It is just here that Marxian Socialists have usually fallen short. Their interpretation of history has been so mechanistic that they have failed to forsee dangers that were obvious to people who had never heard the name of Marx. It is sometimes urged against Marx that he failed to predict the rise of Fascism. I do not know whether he predicted or not — at that date he could only have done so in very general — but it is at any rate certain that his followers failed to see any danger in Fascism until they themselves were at the gates of the concentration camp. (p. 31)

下線1は，こんなとき日本語では「ひとびと」としか言わぬというまでの

ことであるが，以下は珍無類。下線2を理解できる人はいないだろう。訳者自身も，むろんできまい。「彼が」とは誰なのか，まったく分からない。ロンドンはファシズムの台頭を予言できたのだから「彼」がロンドンのはずはない。マルクスがマルクスに異を唱えるはずもない。なにがなんだか分からない。「マルクスにはファシズムの台頭を予言できなかったとして，しばしばマルクスは槍玉にあげられる」ということ。これが分かってはじめて，以下にあらわれる「彼」はすべてマルクスを指していることが分かる。そうでないかぎり，「彼」は終始わけのわからぬままになる。

下線3も「その当時では，予言できたとしても，ごく一般的な形でしかできなかっただろう」として，はじめて分かる。

下線4の，「彼は」とは誰なのか，これまたまったく分からない。なにしろ原文にはないのだから，なおさら分からない。ないものはないのだから，書きさえしなければなんとか無事であったろうに。したがって，この「彼は」を消して，「彼の信奉者たちが」の後に読点を打っておけば，「強制収容所の入口に連れて行かれる」のも，「ファシズムの危険に気づかなかった」のも「彼の信奉者たち」であることが分かるだろう。

同段落，少し後の「ロンドンはおそらく，このような誤りはおかしていない」（p. 32）の原文は London would probably not have made this mistake. なのだから「ロンドンはおそらく，このような誤りはおかしたりはすまい」だろう。

第十段落半ば「もし資本主義を内在的なものとみれば」（p. 32）の原文は provided that one looks upon capitalism as something internal なのだから「もし資本主義を一国内的なものとみれば」だろう。international なものとみるのに対立する立場を「内在的」とは言うまい。

（つづく）

（1989. 7. 14 受理）